

P1-044

乳幼児の食べ方の問題と哺乳習慣の関連

富田 かをり¹、高橋 摩理¹、内海 明美¹、
矢澤 正人²、関谷 紗央里²、五十嵐 由美子³、
宮内 恵⁴、平川 知恵⁵、島村 あみ⁶、弘中 祥司¹

¹昭和大学歯学部スペシャルニーズ口腔医学講座口腔衛生学部門、

²新宿区健康部健康づくり課、

³新宿区健康部牛込保健センター、

⁴新宿区健康部四谷保健センター、

⁵新宿区健康部東新宿保健センター、

⁶新宿区健康部落合保健センター

【目的】

乳幼児は、離乳期を通じて摂食機能を段階的に獲得することで、乳汁以外からの栄養獲得が可能になる。移行過程では哺乳と離乳食摂取は相補的であるため、量だけでなく質的にも相互に関連している可能性が考えられるが、哺乳習慣と食べ方の問題の関連についてはほとんど報告がない。本研究では、哺乳様式や哺乳頻度が食べ方の問題と関連があるかどうかを検討するため、食べ方相談記録を後方視的に解析した。

【対象と方法】

対象は、平成21年度から27年度の7年間に東京都某区の食べ方個別相談に訪れた乳幼児のうち2歳6か月未満の636名(男児325名、女児311名)である。方法は相談時に実施しているアンケート調査から、児の月齢、哺乳習慣についての回答を抽出し、対象児を6～11か月(以下m)、12～17m、18～23m、24～29mの4つの月齢群に分け、それぞれの群ごとに哺乳様式、1日の哺乳回数と食べ方の問題の関連性を検討した。統計学的有意差の検討にはカイ二乗検定を用い、 $p<0.05$ を有意水準とした。

【結果】

相談時点での哺乳様式(母乳、混合、哺乳瓶、卒乳済み)と食べ方の問題の内容には、いずれの月齢群においても関連が認められなかった。一方哺乳回数と食べ方の問題の内容では、12-17m群において、1日の哺乳回数が3回以下の群(以下U3)と4回以上の群(以下A4)で有意な差が認められた。U3がA4より高かったのは「丸のみ」と「つめこみ」の有訴率であり、A4がU3より高かったのは、「時間がかかる」「ためこみ」「好き嫌い」「吸い食べ」「小食」であった。一方、6～11m、18～23m、24～29mの月齢群においては、哺乳回数の違いによる食べ方の問題の内容差は認められなかった。

【考察】

1歳から1歳半の離乳完了期においては、哺乳頻度の差は空腹感の違いに直結し、その結果食べる量やスピード、意欲などと相互に関連すると推察された。月齢がさらに進むと運動量や自我の発達など様々な因子が関わり、哺乳頻度という要因による差が食べ方に現れにくくなると考えられた。食べ方相談では、児の食べ方をみながら、介助方法や食形態のアドバイスをし、口腔機能の発達を促す支援をしているが、哺乳頻度や食事量なども確認しながら包括的な指導をすることが必要であると推察された。

P1-045

保育所通所児の保護者の食育支援に関する調査研究

堤 ちはる¹、三橋 扶佐子²

¹相模女子大学 栄養科学部健康栄養学科、

²日本歯科大学 生命歯学部共同利用研究センター

【目的】

保育所(保育園を含む、以下同じ)職員による通所児と保護者への食育の力量向上、および栄養士(管理栄養士を含む、以下同じ)による支援体制作りのため、通所児の保護者の食育、および食生活の現状把握を目的とした。

【方法】

相模原市保育士会所属の保育所(26施設)通所児の保護者2480人に自記式アンケート調査を28年8～9月に実施した。調査項目は、子どもの朝食摂取状況、子どもの食事の困りごと、普段家庭で食べているもの、食育の状況についてなどである。本調査研究は相模女子大学「ヒトを対象とする研究に関する倫理審査委員会」の承認を得て実施した(受理番号1627号)。

【結果】

回収された調査票は1385件であった(回収率55.8%)。子どもと母親の朝食摂取率はそれぞれ89.6%、73.3%であった。食物摂取頻度調査において肉は「週に4～6日」が49.4%と最多であった。魚は「週に1～3日」「週に1回未満」の合計が77.1%と高く、摂取頻度が最も低かった。家庭の食育の実行度で「全く行っていない」を0、「十分に行っている」を10とすると、平均値は「一緒に食べる」が7.2、「食事のマナーをよくする」が6.8、「食事の栄養バランスをとる」が6.4、「感謝の気持ちをもつようになる」が6.1、「楽しく食べる」が5.6であった。あまり働きかけができていないと考えられる7以下の回答は、「一緒に食べる」が45.2%、「食事のマナーをよくする」が57.3%、「食事の栄養バランスをとる」が64.7%、「感謝の気持ちをもつようになる」が68.1%、「楽しく食べる」が76.2%であった。それらが十分にできない理由として「時間的余裕がない」「子どもがまだ理解できない」が多かったが、「どのようにしたらよいかわからない」の回答もみられた。

【考察】

母親の食育を支援するためには、時間的余裕に関しては保育士と栄養士が協働して母親らに簡単で時間のかからない調理実習などの親子支援が、「どのようにしたらよいかわからない」母親へは、子ども向け食育便りの作成などが有効であると考えられる。また、食育は個別的な支援でもあるので、食を通じて家庭との信頼関係を築くことが、時間的・精神的な余裕をもたせる支援になると思われる。

(謝辞)

本研究は、相模原市保育士会継続研究会の協力のもとに実施したものであり、皆様に感謝いたします。